

大正～昭和戦前期のSP盤演説レコードにおける「場合」の読みについて

著者	松田 謙次郎
雑誌名	国立国語研究所論集
号	11
ページ	63-81
発行年	2016-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000841

大正～昭和戦前期の SP 盤演説レコードにおける「場合」の読みについて

松田謙次郎

神戸松蔭女子学院大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

大正～昭和戦前期の SP 盤演説レコードを取めた岡田コレクションでは、「場合」の読みとして「ばやい」という発音が多数を占めている。これに対して辞書記述、コーパス、国会審議の会議録・映像音声などを調査すると、現代語における読みでは「ばあい」が圧倒的多数を占めており、「場合」の発音が岡田コレクションの時代から現代にかけて大きく変化したことが窺われる。「ばやい」は寛政期の複数方言を記した洒落本に登場する形式であり、明治中期に発表された『音韻調査報告書』は「ばやい」という発音が全国的に分布する方言形であったことを示す。本論文では岡田コレクションにおける「ばやい」という発音が、講演者達の母語方言形であり、その後標準語教育が浸透するなかで「ばやい」が方言形、さらに卑語的表現として認知され、最終的に「場合」の読みとして「ばあい」が一般化したことを主張する*。

キーワード：場合、岡田コレクション、日本語話し言葉コーパス、現代日本語書き言葉均衡コーパス、音韻調査報告書

1. はじめに

「場合」という語については、通常の「ばあい」という発音の他にも、時により「ばやい」また「ばわい」という発音を耳にすることがある。これは音韻論的には次のように考えられよう。「場合」/baai/ は語境界を挟まずに母音連続 /aai/ を含んでいる。母音連続は、(C)(G)VV(M) (C:子音 G:半母音 V:母音 M:促音ないし撥音 (): 選択要素) で音節を構成する現代日本語においては普通に生じるものであるが、有標的な音素連続であるとは言える。この有標的な母音連続を解消するために /j, w/ という半母音が /baai/ の /aa/ の間に挿入され、結果として /bajai/, /bawai/ という変異形が生成される¹。これは音韻的にはごく自然な過程である。

* 本論文は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」(プロジェクトリーダー:相澤正夫, 2009年度～2015年度)の研究成果である。また、本論文の一部は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号:25284082, 研究代表者:松田謙次郎)「変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析」によってなされている。国語研プロジェクトでは、リーダーの相澤正夫氏を始めプロジェクトメンバーの方々から分析についてさまざまなアドバイスを頂いた。また、音声的側面については黒木邦彦氏に、大正～昭和初期および現代語辞書については塩田雄大氏に、洒落本データについては岡部嘉幸氏に御教示を仰いだ。そして査読者からは細部にわたる懇切なコメントを頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。すべての誤りは著者の責に帰すべきものである。

¹ ただし、こうした半母音挿入が行われる音韻的環境の厳密な同定、ないし、この「規則」の位置付けはさほど簡単ではない。間に語境界を含まない(すなわち同一単語内の) /aai/ という母音連続を現実に現代日本語の語彙から探すと、「場合」の他には「間合い」と「他愛」の2語が見つかる。いずれも平板型とアクセントパターンも「場合」と同一であるが、これらの単語については半母音の挿入にばらつきが見られる。「場合」では /j/ 挿入である「ばやい」も /w/ 挿入である「ばわい」も耳にするが、「間合い」では「まやい」を耳にすることはなく、「まわい」は耳にする。「他愛」でも /j/ 挿入の「たやい」は耳にしないものの、/w/ 挿入の「たわい」はかなり一般的である。ただし「他愛」については「たわいもない」と /w/ 挿入された音連続が語彙

共時的にはおよそこのように説明できそうな現象であるが、この説明であれば「ばやい」「ばわい」いずれもが同様に観察されてもよいように思われる。しかしながら、大正から昭和戦前期のSP盤演説レコードを収集した「岡田コレクション」収録の録音を聞くと、「場合」の読みとしては「ばやい」が多い。これに対して現代日本語で「ばやい」を耳にすることはかなり稀であり、この100年余りの間に「場合」の発音は、明らかに大きな変化を遂げているわけである。

本論文では、岡田コレクションにおける「場合」の異なる読みの分布から出発し、まず方言資料や同時代人の談話を含む各種資料を調査することで岡田コレクションにおける語形分布の由来を検討する。さらに複数のデータから現代語における「場合」の発音を調査し、方言資料から得られる知見と重ね合わせることで、岡田コレクションの時代以後に「場合」の読みについて起きた変化について考察し、あわせて岡田コレクションの資料的位置付けについて吟味する。

2. 岡田コレクションにおける「場合」のゆれ

はじめに岡田コレクションについて簡単な紹介をしておこう。もともと岡田コレクションとは、芸能史研究者である岡田則夫氏が所蔵する35,000枚に及ぶSPレコードコレクションのことを指す。そこに含まれる大正から昭和戦前期にかけての演説・講演165作品(約18.5時間)をデジタル化したものが、『SP盤貴重音源 岡田コレクション』として2010年に日外アソシエーツから販売された。本論文で言う「岡田コレクション」とは、正確にはこの音源を指す。さらにこの音源は国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」の一環として、漢字仮名交じり文で文字化された(金澤・相澤(編)2015、金澤・田中・相澤(編)2015)。本論文では、これらの音源と文字化データを用いて岡田コレクションの探索・データ抽出を行っている。

それでは岡田コレクションにおける「場合」の読みの分布を確認しよう。文字化資料に対して録音を聞きながら実際に用いられた「場合」の読みを記録し集計作業を行った結果、「ばあい」が11件、「ばやい」が50件と合計61件の「場合」が26人の演説者から確認された(表1)。

化されており、3.1節の辞書記述にもある通り「ばわい」という発音もかなり意識されているが、「まわい」はそこまでの段階には達していない(表2の11冊の辞書にも「たわい」はあるが「まわい」の記載はない)。まとめると、これら3語のわたり音挿入には次のような分布が見られるのである。

	/j/ 挿入	/w/ 挿入
場合	◎	◎
間合い	×	○
他愛	×	◎

◎：語彙化されている，○：耳にする，×：まったく聞かれない

この分布から判断すると、/aai/ という母音連続で2つの/a/の間に挿入されるわたり音は/w/が一般的であり、/j/が挿入されて語彙化された「ばやい」は例外に属すると言えそうである。同じわたり音の挿入でも、前接母音が/i/であれば/j/が(「似合う」⇒「ニヤウ」)、/u/であれば/w/が(「具合」⇒「グワイ」)のように規則的なものもあれば、上記3語のように前節母音が/a/である場合には/j/と/w/の両方があり得るのである(上野(編)1989: 1)。本論のテーマである「場合」のバリエーションにはこうした音韻論的背景がある。いずれにしても、きわめて限定した単語にしか生起しない音韻環境下で、さらに特定単語にしか変異形が出現しないことから、前接母音が/a/の場合の/j/挿入や/w/挿入は、音韻規則と言うよりも形態音韻規則と考えた方がよいのかもしれない。

表1 岡田コレクションにおける「場合」の読み一覧（演説者生年順）²

読み	演説者名	生年	演説年（西暦）	演説タイトル
ばやい	大隈重信	1838	大正 5 年（1916 年）	憲政ニ於ケル輿論ノ勢力
ばあい	渋沢栄一	1840	昭和 3 年（1928 年）	御大礼ニ際シテ迎フル休戦記念日ニ就テ
ばあい	渋沢栄一	1840	大正 12 年（1923 年）	道德経済合一説（2）
ばやい	島田三郎	1852	大正 9 年（1920 年）	非立憲の解散，当路者の曲解
ばやい	高橋是清	1854	昭和 7 年（1932 年）	金輸出再禁止に就て（2）
ばやい	犬養毅	1855	昭和 6 年（1931 年）	強力内閣の必要
ばやい	尾崎行雄	1858	大正 4 年（1915 年）	司法大臣尾崎行雄君演説（7）
ばやい	尾崎行雄	1858	昭和 3 年（1928 年）	普選投票に就て（10）
ばやい	尾崎行雄	1858	昭和 5 年（1930 年）	正しき選挙の道（10）
ばやい	坪内逍遙	1859	昭和 9 年（1934 年）	ベニスの商人
ばやい	徳川家達	1863	昭和 10 年（1935 年）	済生会の使命に就いて
ばやい	徳富猪一郎	1863	昭和 18 年（1943 年）	ペルリ来航の意図
ばやい	安達謙蔵	1864	昭和 10 年（1935 年）	選挙粛正と政党の責任
ばやい	安達謙蔵	1864	昭和 4-6 年（1929-1931 年）	地方政戦に直面して（2）
ばやい	田中義一	1864	大正 13 年（1924 年）	護国の礎
ばやい	安部磯雄	1865	昭和 10 年（1935 年）	選挙粛正と政府の取締り
ばやい	小泉又次郎	1865	昭和 12 年（1937 年）	理由ナキ解散
ばやい	木下成太郎	1865	昭和 7 年（1932 年）	御挨拶に代へて
ばやい	佐々木清麿	1866	昭和 8 年（1933 年）	仏教講演俗仏
ばあい	浜口雄幸	1870	昭和 4 年（1929 年）	経済難局の打開について
ばあい	加藤直士	1873	大正 10 年（1921 年）	皇太子殿下御外遊御盛徳謹話
ばあい	芳澤謙吉	1874	昭和 6 年（1931 年）	対支政策
ばやい	牧野元次郎	1874	大正 14 年（1925 年）	神守不動貯金銀行
ばやい	牧野元次郎	1874	昭和 10 年代（1935-1944 年）	良心運動の第一声
ばあい	林銑十郎	1876	昭和 12 年（1937 年）	国民諸君ニ告グ
ばやい	松岡洋右	1880	昭和 8-9 年（1933-1934 年）	日本精神に目覚めよ（2）
ばやい	中野正剛	1886	昭和 17 年（1942 年）	米英撃滅を重点とせよ
ばあい	菊池寛	1888	昭和 8 年（1933 年）	文芸と人生（2）
ばやい	近衛文麿	1891	昭和 16 年（1941 年）	日独伊三国条約締結に際して（2）
ばあい	橋本郷見	1899	昭和 10 年代（1935-1944 年）	不動心
ばあい	竹脇昌作	1910	昭和 12 年（1937 年）	居庸関の激戦

このうち実に 4 割以上の 27 件が尾崎行雄の 3 つの演説に現れており、これらすべてが「ばやい」であった。

² 演説タイトル欄のカッコ内の数字は、同一話者・同一演説内において 2 回以上使用された場合の、同じ読みの合計を示す。

各形式の使用度数と話者の生年をグラフにしたのが図1である。軸の左側に「ばあい」の、右側に「ばやい」の読みの出現数を示した。1858年の突出した話者が尾崎である。非常に偏った分布から一定の傾向性を見つけるのは難しいが、強いて言えば1870年代中頃から、1840年の渋沢栄一による3例以降見られなかった「ばあい」がまとまって出現している。明治維新前後を生年とする話者を境として現代語的な読みが徐々に広まっていったという解釈もできそうである。いずれにしても、大正から昭和戦前期におけるフォーマルスタイルの話し言葉では、「ばやい」という発音がかなり一般的であったわけである。

なお、こうした岡田コレクションにおける「場合」の読みは別資料によっても裏付けられる。作家の谷崎潤一郎は1886年東京生まれであり、表1の話者で言えばちょうど中野正剛と同年生まれとなり、同表の26人の中ではもっとも若いほうの話者に相当する。その谷崎が自著「瘋癲老人日記」を音声劇化したラジオ放送用台本を使って1962年に朗読を行っている³。この台本と音声を取めたCDを含む資料では、録音当時76歳であった谷崎の発音がわかるわけだが、この録音では「場合」は6件出現する。その内訳を見ると、2件は颯子役の淡路恵子（東京府東京市荏原区、1933年生まれ）による朗読であり、いずれも「ばあい」である。残り4回の谷崎の朗読では「場合」はすべて「ばやい」と発音されており、淡路の朗読と好対照をなしている。谷崎のこうした発音は、表1の岡田コレクションでの分布にあてはめると、出身（東京）、生年ともに近い近衛文麿の「ばやい」という発音と符合するものである。

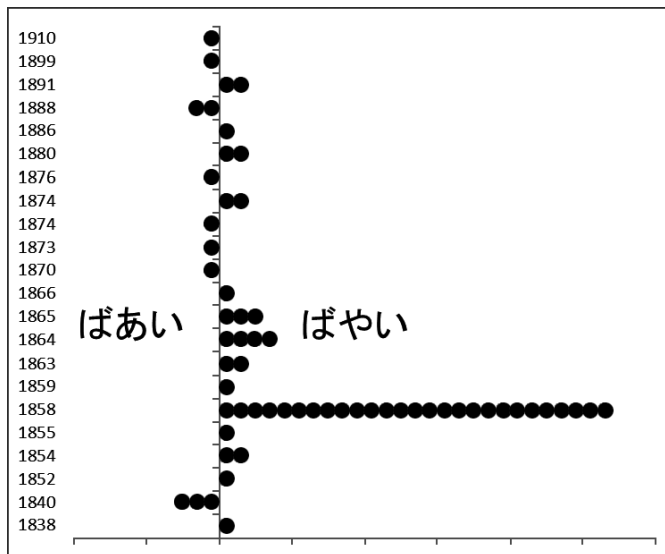


図1 岡田コレクションにおける「場合」の読みの度数分布（話者生年別）

³「音声劇『瘋癲老人日記』台本 谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』より」（2011）『新潮』1276: 162-178.

谷崎資料は50年以上前の録音であり、録音年ベースで考えると岡田コレクションと現代の中間に位置するものであり、その正確な位置付けには一定の慎重さを要しよう。谷崎の発音が言語形成期以後変化していないと仮定すると、朗読音声も含む岡田コレクションとは近い性格のものと考えられる⁴。岡田コレクションと谷崎の朗読資料という、同様な性格を持った別個の資料において、生年と出身に近い2人の話者が同様な発音をしていたということは、少なくともこの年代の東京生まれの話者にとって「ばやい」という読みが一般的であったことを示すものである⁵。やはり「場合」の読みはこの100年余りの間に大きく変化していることになる。

3. 現代語における「場合」の読み

それでは現代語では「場合」という単語はどのように発音されているのだろうか。現代日本語における「場合」の読みを、辞書記述、日本語話し言葉コーパス、現代日本語書き言葉均衡コーパス、そして国会審議音声資料といった各種資料から検討してみよう。

3.1 現代語辞書の記述

現在広く使われていると思われる辞書で、「場合」にどのような読みが付されているのか、「ばやい」や「ばわい」が独立項目として立てられているのかを調査した。調査対象とした辞書は、集英社『国語辞典』初版(1993年)、新潮『国語辞典』第2版(1995年)、小学館『大辞泉』初版(1998年)、小学館『日本語新辞典』初版(2005年)、三省堂『大辞林』第3版(2006年)、岩波『広辞苑』第6版(2008年)、岩波『岩波国語辞典』第7版(2009年)、大修館『明鏡国語辞典』第2版(2010年)、三省堂『新明解国語辞典』第7版(2012年)、角川『国語辞典』第420版(2014年)、三省堂『三省堂国語辞典』第7版(2014年)の11冊である。それぞれの記述をまとめたのが次頁の表2である。

11冊中、見出しとして「ばやい」を掲げた辞書は『広辞苑』のみであり、「ばわい」を独立項目として立てた辞書は皆無である。ただし「ばやい」「ばわい」という読みの存在を記した辞書は4冊に上り、またそれらの出版年を見ても、2種の発音が稀とは言えずに絶滅したものではないことを窺わせる。「ばやい」「ばわい」に言及した辞書の記述では、『三省堂国語辞典』のように、話し言葉での特徴として捉えるか、『広辞苑』や『明鏡国語辞典』のように「ばあい」という基本的発音から派生した訛形、変化形として捉える2通りがあることもわかる。表からは省いてあるが、『日本国語大辞典(第2版)』(小学館, 2003)(以下『日国』)では、「ばやい」にはカラ見出しが立てられている。「ばあい」の項には島根方言での用例が引用され、「バヤイ」は埼玉、東京、岐阜、三重、和歌山、鳥根、伊予などの方言である旨の記述がある。『日国』では「ばやい」

⁴ 演説も原稿読みが含まれていたことから「朗読」と見做せなくもないが、岡田コレクションには、北原白秋、火野葦平、巖谷小波、坪内逍遙といった作家らによる自作の朗読、また児童による国民学校国語教科書や読本の朗読なども含まれている。

⁵ なお、近衛や徳川家達(近衛と同様に「ばやい」と発音している)はおそらく山の手の出身であったと推察されるが、同じ東京でも日本橋という下町地域の出身である谷崎の発音が同じであることから、「場合」についてはその発音差に山の手・下町という東京内での方言地域差は関連がなかったと言えるかもしれない。

表2 現代語国語辞書における「場合」の記載状況

○：独立項目として立項されている ×：独立項目として立項されていない

	ばあい	ばやい	ばわい
集英社『国語辞典』 初版（1993）	○	×	×
新潮『国語辞典』 第2版（1995）	○	×	×
小学館『大辞泉』 初版（1998）	○	×	×
小学館『日本語新辞典』 初版（2005）	○	×	×
三省堂『大辞林』 第3版（2006年）	○	×	×
岩波『広辞苑』 第6版（2008）	○	○ 「バアイの訛」との注 記あり	×
岩波『岩波国語辞典』 第7版（2009）	○ 「「ばわい」「ばやい」 となまることがある」 との注記あり	×	×
大修館『明鏡国語辞典』 第2版（2010）	○ 「「ばわい」「ばやい」 は「ぐわい（具合）」「し やい（試合）」などと 同様、変化した形」と の注記あり	×	×
三省堂『新明解国語辞典』 第7版（2012）	○	×	×
角川『国語辞典』 第420版（2014）	○	×	×
三省堂『三省堂国語辞典』 第7版（2014）	○ 「ばやい・ばわい（話）」 として、話し言葉で両 音がある旨の注記あり	×	×

が方言形であることを明確に打ち出しているわけである。

以上のように、少なくとも現代語辞書の記述の上では、「場合」の読みには「ばあい」の他に「ばやい」と「ばわい」が存在すること、ただし後者2つの読みは少数派であり記載する辞書も比較的少ないこと、そして「ばやい」や「ばわい」が「ばあい」という基本形から派生した読み、ないし一部の方言に見られる方言形式であるものと捉えられているわけである。つまり、「場合」の読みとしては、「ばやい」や「ばわい」は周辺的な読みということになる。

こうした辞書記述は、「場合」の3種類の読みの分布について質的な観点からおおまかな目安を与えてくれる。その一方で、辞書記述だけではそれらの読みが現代日本語でどれほど使われているのかという、量的情報を把握することは不可能である。3つの読みの分布を量的観点から見るために、ここで2つのコーパスデータに目を転じよう。

3.2 「日本語話し言葉コーパス」における「場合」の読み

現代日本語における「場合」の読みを量的観点から探るためには、コーパスデータを検索すべきである。そのために、現代日本語の話し言葉の代表的なコーパスである、「日本語話し言葉コーパス」(以下 CSJ) を検索してみよう。CSJ はおおまかに学会講演、朗読、模擬講演、対話音声、その他と 5 つのカテゴリーに分類される現代日本語の自発音声を収録しており、転記テキスト、形態論情報をはじめとするさまざまな付加情報を持つ(前川 2006: 3ff.)。ここでは代表表記を「場合」と指定してデータを検索し、抽出された発音形を「ばあい」「ばやい」「ばわい」「その他」の 4 つに分類した⁶。

表3 「日本語話し言葉コーパス」における音声種別による「場合」の発音分布 (%)

	ばあい	ばやい	ばわい	その他
学会講演 (N=7,664)	94.70	0.03	3.48	1.79
朗読 (N=52)	98.08	0.00	1.92	0.00
模擬講演 (N=1,435)	94.63	0.07	1.95	3.35
対話音声 (N=47)	97.87	0.00	0.00	2.13
その他 (N=310)	96.45	0.00	0.97	2.58

表3の数字は、CSJにおける「場合」の圧倒的多数が標準的な「ばあい」であり、それ以外の発音はいずれも極めて少数であることを示す。少数派の2発音では、「ばわい」の方が「ばやい」よりも使われていると言えそうである。

「ばやい」が聞かれたのは、学会講演が2件、模擬講演が1件の異なる3名による発話であったが、このうち学会講演の1件は出生地、言語形成期ともに海外であるので除外すると、結局「ばやい」という発音は2件しかないことになる。この2つの「ばやい」を発話した話者の属性は、収録当時60～64歳の富山県出身の男性と、30～34歳の神奈川県出身の女性であった。

「ばわい」が特に学会講演で観察されていることは注目される。対話音声のデータ量が少ないことから確実な判断は難しいところだが、比較的自発性の低い、スタイルが高めの話し言葉において使われやすい傾向があることが窺われよう。

CSJは辞書記述ではわかり得なかった、3つの読みに関する話し言葉における量的分布の目安を与えてくれた。それでは書き言葉での分布からは、3つの形式について何がわかるであろうか。現代日本語の書き言葉での分布を確認するために、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を調査してみよう。

⁶ 「その他」には、他の3形式に分類しがたいものを含めた。これらは発音形フィールドで記述された形式の最初の拍によって次の4タイプに分類される。(1) バ行音で始まる「バ」「バイ」「バエー」「バン」「ブアイ」など、(2) 「マ」で始まる「マイ」「マアイ」「マエ」など、(3) 「ワ」で始まる「ワイ」「ワアイ」、(4) いずれにも属さない「オイ」「ダイ」。

3.3 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」における「場合」の読み

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(以下 BCCWJ) は、現代日本語の書き言葉のできるだけ多くの変種を偏りなくサンプリングすることで、その書き言葉の平均的な全体像を取り出そうとしたものである(国立国語研究所コーパス開発センター 2015: 1-2)。BCCWJ は最大で 1976 年から 2008 年にわたり、書籍、雑誌、新聞から白書、教科書、ブログ、法律、国会会議録などにいたるまでのデータを収録している。書き言葉であるから、BCCWJ で「場合」と漢字表記された場合の読みは知るべくもないが、「ばあい」「ばやい」「ばわい」とかな書きされたケースのみを対象とし、それらの抽出結果から現代語における「場合」の読みの分布を推定することは可能である。

BCCWJ で 3 つの読みを検索すると、「ばあい」が 529 件、「ばやい」が 5 件ヒットする。「ばわい」の用例は見当たらなかった。ちなみに漢字の「場合」は 95,881 件ヒットしている。つまり読みが判明するのは書き言葉コーパス全体での「場合」の 0.6% 程度とごく一部になってしまうが、3 つの読みの比率が話し言葉における読みの分布と同様であると仮定すると、「ばやい」という読みは「ばあい」の 1% 程度ということになる。ここからまず、少なくとも現代語の書き言葉ではかなり稀少な読みであることがわかるが、これは言うまでもなく先の CSJ の結果と符合するものである。

さらに「ばやい」の 5 件の内訳を見ると、ブログが 3 件と小説の会話文、対談の一部がそれぞれ 1 件である。以下の例にも見られるように、いずれも書き言葉とは言え、きわめて話し言葉性の高いジャンルからの用例である。

- (1) 男の涙のほう弱くないですか？だって男ってめったに泣かないじゃん？？つか、男のばやい、弱い女を泣かせてしまった…という罪悪感があるんちゃうのか？？ [Yahoo! 知恵袋]
- (2) あとはいろんなことされてる妄想肉体を思い出すとしたら、今の彼のばやいは、ずばりちんちん♪反ってとても気持ちいいちんちんなので、思い出だけで興奮する [Yahoo! 知恵袋]
- (3) 日本の企業など狙われたら、ひとたまりもない。日銀総裁で、だだを捏ねてるばやいでない。 [Yahoo! ブログ]
- (4) ほんと、読んだ後に「こりゃ、学校とかいってるばやいじゃねーな！」で思ったよ。きみがやめなくてよかったよ。ほっ。 [D [di:]・鹿島田真希・黒田晶 (著)『文藝』2002 年春号 (第 41 巻第 1 号)]
- (5) あの後が売店で売れたっていうんですね。「おまえさん、甘納豆食ってるばやいじゃないよ」って、あれで甘納豆売れたっていうんだから。 [井上ひさし・吉川潮・山藤章二 (著)『笑い』の混沌]

BCCWJ における以上のような使われ方は、「ばやい」が「場合」の読みの単なる少数形だというだけではなく、きわめて高い口語性・低い文体性、さらに言えば卑語的性格をもった形式であることを物語る。このことは、CSJ の分布からは読み取り得ない、現代語における「ばやい」

に関する重要な特質である。

3.4 国会審議映像検索システムによる音声資料における検索結果

ここまで現代語における「場合」の読みを、各種コーパスや辞書記述を渉猟することで検討してきた。コーパスについては、CSJは学会発表、模擬講演を収めており、BCCWJについては書き言葉である。言うまでもなく「現代日本語の話し言葉」とは途方もなく巨大な母集団であり、これを把握するのは容易ではない。ここはCSJのみに依存するのではなく、CSJとは別個に、独立したデータでも「場合」の発音を検証したいところである。

国会会議録が現代日本語の資料として有用であることは知られている（松田 2008）。現在の国会については、その議員における男女比や年齢構成に現代日本の実情とは乖離した側面があることは否定するべくもないが、それでも国会会議録の調査からさまざまな日本語の動態に関する重要な知見が得られることは、近年多くの研究によって明らかにされている（南部 2007, 服部 2011, 佐野 2011）。

その国会発言の実際の音声を聞こうとする場合、NHKによる一部の審議中継を視聴するか、衆参両院のサイトが提供する中継録画を利用するのが一般的である。しかし会議によっては数時間も要するものもある中で、会議録での発言を元に録画から特定単語を含む発言にたどり着くのは容易ではなく、多数の発言を確認しようとすると膨大な手間と時間を要することになる。

この問題を解決するのが「国会審議映像検索システム」である。国会審議映像検索システムは、ウェブサイト上で指定したキーワードを国会会議録で検索し、併せてそのキーワード部分の動画を表示してくれる。国会図書館の提供する国会会議録と、衆参両院の提供する審議映像を自然言語処理技術により関連づける形になっている（増山・竹田 2015, 増山他 2015）。

このシステムは、もともと政策研究大学院大学、東京大学および京都大学の研究者らによる比較議会情報プロジェクト（科研費基盤研究(S)「政策情報公開の包括化・国際化・ユニバーサル化」）の一環として開発されたもので、政策情報供給の効果検証と立法府の政策情報公開を促進するという目的を担っていた。しかし現代日本語研究者の目から見ると、このシステムは国会会議録に含まれる語句の音声および発話時の動画を瞬時に確認できるという点で、言語研究・音声研究に計り知れないほどの恩恵をもたらすシステムと捉えられる。収録された会議は国会会議録全体から見るとごく一部であるとは言え⁷、これにより会議録に記録された発言が、実際はどのように発音されたのかを高音質で聞くことができ、発言者の様子も観察することができる。

以上のような国会審議映像検索システムの特徴に注目し、ここでは国会審議における「場合」の発音の分布を探ることとした。国会審議映像検索システムで、2015年1月26日から4月27日の期間で「場合」を検索すると、衆参合同すべてを含めて6,697件ヒットする。ここから10件ごとに発言を視聴し670件の「場合」の発音を確認することで簡易的なランダムサンプリング

⁷ 衆議院と両院・合同は第174回国会（2010年）、参議院は第182回国会（2012年）以降の会議に限定される。ただし、両院・合同についてはその間の会議でも収録されていないものもある。詳細は <http://gclip1.gripts.ac.jp/video/usage/sessionList> を参照のこと。

を行い、この期間の国会審議における「場合」の発音分布を推定することを試みた（表4）。

表4 国会審議映像検索システムによる「場合」検索の結果⁸

語形	使用件数	%
ばあい	634 件	94.6%
ばわい	28 件	4.1%
ばやい	3 件	0.5%
視聴不能	5 件	0.8%
合計	670 件	100.0%

表4は、CSJにおける発音分布（表3）と酷似した分布を示す。「ばあい」に比べるとごく僅かであり、4%ほどに過ぎないが、「ばわい」という音声も28件聞かれた⁹。これに対して「ばやい」は3件であり、0.5%に過ぎない。こうした分布は、とりわけCSJの学会講演や模擬講演とはかなり近い数字を示している。国会審議においても「場合」の発音は「ばあい」が圧倒的多数を占めているのである。

ここでCSJと国会審議映像検索システムが提供するデータは、同じ現代日本語のフォーマルスピーチに分類される音声であるとは言え、互いに独立したソースからのものであることに注意したい。2つの独立したデータから得られた分布が高い一致を示すという事実は、その分布の信憑性の高さを物語るものと言えるからである。

ところで、表4は国会発言ということから、現代日本語におけるフォーマルスピーチにおける「場合」の発音分布を表すものと考えられるが、「岡田コレクション」の発話もやはりフォーマルスピーチに分類される類の音声であった。しかし表1に見る大正から昭和戦前期におけるフォーマルスピーチにおける「場合」の発音分布は、現代のそれとは大きくかけ離れたものとなっている。かつては多数派であったはずの「ばやい」は、今や完全にごくごく稀にしか聞かれない、周縁的形式となってしまっているわけである。表1の発音は、演説年ベースで1916年から1943年まで、今から73年から100年前までの間になされたものである。この間、「場合」の発音の諸形式に何が起きたのであろうか。ここで、「場合」の発音の方言的分布に注目してみよう。

⁸ 「視聴不能」は、ヒットした映像・音声と表示される会議録文面がズレている場合で、何らかのエラーにより目的の動画が視聴できなかった場合を指す。

⁹ 「ばわい」が使われる典型的なケースの1つは、次の発言のように「場合」に強調が置かれる場合である（発音記号は筆者挿入）。

ただ、今おっしゃっていただいたように、強制的、な、場合[w]、強制的に付き添いを求めていく場合[a]、全く保護者の方々と学校との間での合意形成もない、そして一方的に、ま、あの一、付き添いを求められ、そして例えば、えー、ま、あ、保護者が病気になる、そして学校に付き添いで行けない状態になっている、そして子供も、あ、お子さんも、ま、学校に通学することができなかったという場合[a]に、あ、教育を受ける権利というものを著しく侵害されているという状況にもなります。〔金子恵美議員、2015年3月10日、第189回国会衆議院予算委員会第四分科会〕

最初の「場合」では、直前の「強制的」からテンポが極度にゆっくりなものとなり、そのまま「場合」が強調されて発話されている。対して2回目の「場合」は通常のスピードで、なんらの強調も置かれずに発話されているのである。

4. 「場合」の読み：方言分布

すでに見た通り、『日国』は「ばあい」の項では島根方言での用例を引用し、「ばやい」は埼玉、東京、岐阜、三重、和歌山、島根、伊予などの方言であるとしている。複数方言で見られる語形であるということは、表1における岡田コレクション中の「ばあい」～「ばやい」の分布が、出身方言差として説明できる可能性もあるということを意味する。そこで「場合」の読みの方言分布を検討してみよう。

『日本方言大辞典』（小学館、1989）では、「ばあい」の項に「《ばやい》とも」として島根の例を引き、さらに小項として「ばやい言（ゆ）ー」（「都合のよいことを言う」の意）を福岡市の例として挙げている。『日国』のリストに福岡市が加わり、結局埼玉、東京、岐阜、三重、和歌山、島根、伊予、福岡の全国8箇所で「ばやい」が確認されていることになる。

このリストを、岡田コレクションで「場合」を使用した26名の話者の出身・発音と照合してみよう。26名のうち9名（島田三郎、高橋是清、徳川家達、近衛文麿（以上東京出身）、安部磯雄、中野正剛（以上福岡出身）、坪内逍遙（岐阜出身）、佐々木清麿（三重出身）、渋沢栄一（埼玉出身））が『日国』と『日本方言大辞典』の記載する方言地域の出身であり、彼らの「場合」発言13件中、渋沢の3件を除く10件が「ばやい」であった。「ばやい」の使用が確認されている地域出身者については、ほとんど「ばやい」が使われているわけである。一方「ばやい」の使用が未確認の地域出身者17名から、突出している尾崎行雄を除いた16名について見ると、「場合」発言21件中14件が「ばやい」であり、「ばやい」使用地域出身者よりは割合が低くなるが、それでも実に2/3が「ばやい」なのである。合計でもほぼ2/3が「ばやい」を使っていたわけであり、岡田コレクションにおいては「場合」の発音は話者の出身地によらず「ばやい」が優勢であったと言える（表5）。

表5 話者出身地による岡田コレクションにおける「場合」2発音の分布
（フィッシャーの正確検定による検定：N.S.）

	ばあい	ばやい	合計
使用地域出身	3	10	13
使用未確認地域出身	8	13	21
合計	11	23	34

「場合」の発音分布が「ばやい」使用地域とさほど高い相関を見せなかったことは予想外の結果である。この原因として『日国』および『日本方言大辞典』の「ばやい」使用地域に関する情報が不十分であった可能性がある。つまり、実際は少なくとも大正から昭和戦前期の時代においては、日本全国のもっと広い地域で「場合」の発音として「ばやい」が使われていたのではないであろうか。

この疑いは、国立国語研究所による『全国方言談話データベース』を検索することでさらに濃厚なものとなる。『全国方言談話データベース』全20巻に収録されている全国47都道府県の話者の生年は、表1にある岡田コレクション収録話者の生年の下限と重なるあたりからそれよりや

や後の時期までの範囲である。ここから、岡田コレクションとほぼ同時代の話者について、全国的な方言分布を調査できることになる。ただし、一都道府県につき3名による30分程度の談話であり、ここでも資料的限界を考慮する必要がある。全都道府県の文字化資料から「場合」の読みを検索すると¹⁰、表6のような分布が得られた。なお、「バアイ」と「パーイ」は同一発音と見做してある。

表6 『全国方言談話データベース』における「場合」の読みの都道府県別分布

都道府県名	バアイ / パーイ	バヤイ	バワイ
北海道	1	0	0
秋田	1	0	0
岩手	1	0	0
山形	2	0	0
群馬	1	0	0
埼玉	1	0	0
山梨	1	0	0
福井	1	0	0
京都	2	0	0
大阪	1	0	0
岡山	1	0	0
山口	4	5	0
高知	0	0	1
合計	17	5	1

ここでは「バヤイ」は山口に5件、そして「バワイ」は高知に1件出現している。山口での5件について内訳を調べると、次のように2名の話者によって「バヤイ」が使用されており、「バヤイ」が個人的な癖ではないことが確認できる¹¹。

- (6) A: ソリヤー タウエノ ナエバコ デ ヤル バヤイモ (国語研 2004: 191)
 (7) A: ホエカラ フツーノ ナエデ ヤル バヤイモ オナシ コトイ。(国語研 2004: 191)
 (8) B: オカダ ノ オー タニ タノ バヤイワ (国語研 2004: 193)
 (9) B: ミズガ トレン トカ ユー バヤイワ (国語研 2004: 193)
 (10) A: トコロガ アー ハコナエオ ヤル バヤイワ ハー (国語研 2004: 194)

山口での「バヤイ」の使用は『日国』でも『日本方言大辞典』でも触れられていなかった事実であり、ここからも「バヤイ」がこれらで記述された地域以外でも使われていた可能性がいよいよ高まるのである。

大正～昭和戦前期における「場合」の発音の方言分布を推定するために、1905年に出版され

¹⁰ カタカナ書きの文字化資料を、バアイ、バヤイ、バワイ、パーイの4形で検索した。

¹¹ 話者Aは男性、明治44年生まれ(収録時67歳)、話者Bは女性、明治29年生まれ(収録時82歳)である。

た国語調査委員会による『音韻調査報告書』を検討してみよう。幸運なことに同報告書の第12条では、「みあひ」（見合）、「にあふ」（似合う）、「うけあふ」（請合）、「ばあひ」（場合）、「まあひ」（間合）ナドノ「あひ」「あふ」ヲ yai（ヤイ）yau（ヤウ）と發音スルコトナキカ」としてまさに「場合」の發音を問うている。実際の調査は明治36（1903）年であるので、岡田コレクションの録音がカバーする時期からやや時代が遡るが、もっとも近い時期での方言分布を確認する資料としては第一級の資料と言えよう。

本邦初の全国レベルの方言調査であった『音韻調査報告書』にはさまざまな資料的限界がある。まず各県により記述の詳細さや地点密度に大きな開きがある。第12条への回答で見ると、全国302地点より寄せられた回答のうち、愛知県の40地点、宮崎県の35地点といった地点密度の高い地域もあれば、同一都道府県で1地点の回答しか提示していない（「県下一般」として一括した回答）ところも27箇所上る。また各地点で調査と回答を行った担当者の言語学的知識にも相当の格差が見られ、「發音ス」「發音スルコトアリ」とのみ回答した地点が多数ある一方、島根県石見国のように音韻環境に言及して記述するところも存在する。

こうした資料的限界を念頭に置いた上で第12条の回答を分析してみよう。上記の質問に「バヤイ」という發音があると回答した地点数は269に上る¹²。これは、全回答地点数302地点の89%に相当する数字である。「バヤイ」が回答されなかった地域を検討すると、回答が不十分で判断できなかったもの、また北海道、秋田、徳島、沖縄といった1地点のみの回答しか記載されていないものを除くと、「バワイ」「バワエ」といった回答が山形でやや目立つくらいであり、「バヤイ」が全国にほぼ一様に分布する發音であったことがわかる。

なお「バワイ」については、全国でたったの8地点からしか明示的な回答がないが、そもそも質問では「ヤイ」と「ヤウ」しか選択肢が提示されていなかったのであるから、「バワイ」という選択肢外の回答が僅少であったことは驚くには当たらないであろう。現実には「バワイ」という發音が「バヤイ」と同様に一般的であったと言うことも十分に考えられるが、この資料からは確認のしようがない。

まとめると、『音韻調査報告書』の伝える20世紀初頭の全国方言分布に従うと、「バヤイ」という發音は『日国』や『日本方言大辞典』の記述よりもはるかに広汎に全国に一様に分布していた。表5において「使用未確認地域出身」とされた話者も、実は使用地域出身者であった可能性が高いわけである。事実、表1の話者出身地を検討すると、『音韻調査報告書』において調査地点が1地点ではあったもののまったく「バヤイ」が回答されなかった北海道、秋田、徳島、沖縄のいずれにも該当しない。『音韻調査報告書』の調査年と表1の話者生年のズレを考慮したとしても、

¹² ここでは、「バヤイ」の他「バヤエ」、「Bayā」、「バヤエ」など「バヤイ」およびそれに類する發音を明記した回答とともに、「スルコト多シ」も「スルコト有リ」「發音ス」などといった一括回答も「發音がある」と判断した。より厳密に「バヤイ」およびそれに類する發音を明記した地点のみに絞るとすると、地点数は50地点となり、都道府県単位で言うと東京、新潟、埼玉、山形、京都、大阪、愛知、滋賀、富山、和歌山、島根、岡山、広島、香川、高知、佐賀、宮崎がそれに当たる。いずれにしても、『日国』と『日本方言大辞典』が当該方言として挙げたリストに含まれない新潟、山形、京都、大阪、愛知、滋賀、富山、岡山、広島、香川、高知、佐賀、宮崎に「バヤイ」類が使われているわけである。

『音韻調査報告書』の伝える状況と彼らの言語獲得期の方言状況とが、大きく変化していたとは考えにくい。

以上のような『音韻調査報告書』の考察結果からすると、「岡田コレクション」において「バヤイ」という発音が多数を占めたのは、実はこうした当時の方言分布を反映したものに過ぎなかったとすることができそうである。つまり「ばやい」と発音した各話者は、単に自分の母方言形を演説・講演の際に使用していたのではないであろうか。岡田コレクション所収の録音において「ばあい」という発音も聞かれたのは、各地域において「場合」の発音に「ばあい」～「ばやい」あるいは「ばわい」というゆれが存在していたからに他ならない。

方言分布を探ることで、岡田コレクションにおける「場合」の発音分布を説明する見込みが立ったところで、岡田コレクション以前の「場合」の読みの歴史に触れてみたい。

5. 「場合」の読み：歴史的資料

『日国』の用例では、坪内逍遙の「内地雑居未来乃夢」(1886) 13「斯るおそろしき場合(バアヒ)に臨めど」¹³、および斎藤緑雨「油地獄」(1891) 11「場合(バアヒ)だけ繕って帰らうと思って居ると」がある。

ヘボン『和英語林集成』では、初版(1867年)では「場合」自体の項目がなく、再版(1872年)では「場合」が「BA-AI バアヒ 場合」として記載され、第3版(1886年)でこれに加えて「BAYAI バヤイ see ba-ai」というカラ見出しが立てられており(飛田・李(編)2001)、上記の坪内、斎藤の用例と合致する。『言海』初版(1889年)には、「ばあひ」のみが採用されているが、明治中期に「ばやい」が広く使われていたことは、前節の方言分布からも明らかであろう。

江戸期では、『日国』は意味項目こそ異なるが洒落本『阿蘭陀鏡』(1798)を引用している。洒落本を網羅的に調査する余裕はないが、『阿蘭陀鏡』を含めて目に付いた洒落本の用例を3件以下に掲げておく¹⁴。

- (11) 毎ばん〜ちよいといきの。ちよいとばやいに。ゑらわあゑらわあさんじゃ。(『阿蘭陀鏡』卷三四ウ、『洒落本大成』17, p.96)
- (12) ゆうてくれるばやいでもあるまい(『困多好鬻』十二オ、『洒落本大成』18, p.307)
- (13) 小たけがいても同じ場合なり。(『河東方言箱まくら』下ノ五ウ、『洒落本大成』27, p.136)

『阿蘭陀鏡』と『河東方言箱まくら』は京都方言、『困多好鬻』は尾張方言(彦坂1979)と考えると、

¹³ なお坪内逍遙について言えば、演説年こそ昭和9年と最晩年であったとは言え、『日国』の引用する「内地雑居未来乃夢」における読みと表1における坪内の読みが異なることは興味深い。これはもちろん書き言葉と話し言葉の差と片付けられそうであるが、坪内の演説は「ベニスの商人」の朗読であり、ラジオ放送とは言え非常に書き言葉に近いものであった。よってこの事実は、坪内個人内のゆれを示すものとして捉えることができそうである。

¹⁴ いずれも『洒落本大成』所収のテキストによる。なお、『河東方言箱まくら』の検索には国立国語研究所コーパス開発センター(市村太郎ほか)編(2015)『ひまわり版「洒落本コーパス」(日本語歴史コーパス江戸時代編)』http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#share (Ver. 0.5) (2016年1月24日確認)を使用した。

それらがいずれも『音韻調査報告書』で「ばやい」が報告されている方言であることは注目に値しよう。「ばやい」はこれらの地域においてその後も生き延び、ほぼ100年後に『音韻調査報告書』の調査で確認されたものと推察される。つまり江戸後期には「ばやい」が「場合」の読みとして、少なくとも複数方言において使われていたわけである。現在のところ京都方言と尾張方言以外では確認できないものの、他方言でも使われていた可能性は高い。江戸後期における「ばやい」が『音韻調査報告書』で確認され、そこから数十年間にわたり岡田コレクション所収の演説・講演でも使用されたというのが、江戸後期から昭和戦前期に至る「場合」の読みの歴史的な流れだということになる。

6. 「場合」の読みの近現代史と岡田コレクションの位置付け

以上、「岡田コレクション」における「場合」の読みの分布から出発し、現代語における3つの読みの分布、方言分布、さらに歴史的な流れを考察してきた。ここでこれらを統合して、「場合」の読みの近現代史の復元を試みる。

岡田コレクション所収の演説・講演では、「場合」の読みは「ばやい」が多数派であった。「ばやい」は江戸後期より「場合」の読みの一変種として複数方言で確認されており、岡田コレクションの話者達の言語形成期にはほぼ全国で使用されていたと推測される。その方言形である「ばやい」がフォーマルスピーチである演説・講演で使われたのは、おそらく「ばやい」が方言形であり、(現代の感覚で言えば)避けるべき発音であるという意識が低かったからと考えるのが妥当かと思われる。

江戸末期から明治初期にかけて言語形成期を迎えた岡田コレクションの話者達の時代には、地方の初等教育における標準語教育は、とりわけ音声面においては、現代のそれとは比べるまでもなく、かなり貧しいものであった。また、ラジオの全国放送開始が1928年であったことを考慮すると、地方出身の話者達が共通語音声に触れる機会もかなり限定されていたことであろう。当然そうした状況にあった話者達の音声は強い方言色を留めていた。ただ、岡田コレクション所収のデータは文章語的性格が非常に強かった(金澤 2015: 12)。そのために、清水(1988: 132ff)の指摘するように、演説レコード資料に収められた録音資料は、音韻面はともかくとして、語彙・語法面においては当時の全国共通語的性格を意識した東京語資料と評価できるのである。言わば演説データの書き言葉的性格が話者のもつ方言性を隠蔽していたと言える。

ただし、これはあくまで語法・語彙のレベルのことであり、ひとたび音声に目を向ければ話者の方言性はたちまち露わとなる。岡田コレクション所収の録音では、たとえばサ・ザ行音の硬口蓋音化だけでも以下のような例が見つかるのである¹⁵。

(14) 憲法の下には、税(じえい)を取るのも、或いは金を使うのも、国民の権利義務を規制す

¹⁵ 硬口蓋音化の例については、漢語の場合は続くカッコ内に、その他の場合はそのまま表音的表記を行った。演説資料における合拗音の使用については、清水(1989)を、また岡田コレクションにおける方言使用については、松田(2016)も参照されたい。

るところの全ての法律も、帝国議会の協賛なくして行なわれるものではないのである。(大隈重信「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」)

- (15) 天皇は地球上ばかりを統治なさるのではなく、宇宙の全てをも主宰なさせらるべく、先天的(しえんてんてき)に定まっておるのであります。(内田良平「日本の天職」)
- (16) 今やその主張は貫徹し、全国(じえんこく)に亘って総選挙の戦いが展開されました。(頼母木桂吉「総選挙ニ直面シテ」)
- (17) 満州国の独立を扶植しえねばならず(松田源治「挙国一致ノカヲ以ッテ難局ヲ打開スベシ」)

演説のほぼすべては原稿読みであったと思われるが、原稿中に「場合」の文字を見た演説者は何の疑問も持たずに方言形の「ばやい」を発音したのであろう。その過程では自分が方言形を使用しているという意識は希薄だったはずである。それは、自分の音声を含む方言的性格に無自覚であったからなのであり、おそらくは話者達は自分が標準語を使用していると考えていたのではないであろうか。この点で、岡田コレクションで見つかる方言音声は、まさに「気づかない方言」と言えそうである¹⁶。気づかないがために、フォーマルスピーチであったはずの演説でも方言形を用いたのだと説明がつく。

その後、教育制度の充実とマスメディアの発達、そして戦後の急速な共通語化によって、地域言語話者も「ばやい」の方言性に気付くところとなり、「ばやい」の公的場面における使用は急激に減少したのであろう¹⁷。「気づかない方言」は「気づく方言」となり、「ばやい」は方言語形として広く認知されるに至った。それにとどまらず、方言形としての認知はそのマイナスイメージも纏うことになり、「ばやい」は卑語的性格すら帯びるようになった。先に引用したBCCWJの用例、とりわけ(2)のような例は、まさにそのことを雄弁に物語るものである。ここに至り「ばやい」は特殊な表現的効果を持った「場合(ばあい)」の稀少な異形態の1つとなり、日常生活においてごく限定された状況下で使用される形式となったのである。コーパスや国会審議における出現状況は、まさにそのことを示している。「ばやい」は地域方言形式から社会方言形式へと変貌を遂げたと言ってもよいであろう。

¹⁶ 実は「気づかない方言」であるためには、この時点での標準語形が「ばあい」であることが確立されている必要がある。ここではその傍証として2点を挙げておく。1つは表1における竹脇昌作(当時日本放送協会ラジオアナウンサー)の発音が「ばあい」であったという事実である。放送のことばとして「ばあい」が選択されていたことは、それが標準語形であったという根拠の1つとなろう。もう1つは同時代の辞書記述である。岡田コレクションの収録期である大正期から昭和戦前期に発行された以下の辞書について、「場合」の読みを調査した:『武信研究社和英大辞典』(1918年版, 1932年版),『齋藤和英大辞典』(1928年版),『改修言泉』(1929年版),『国語発音アクセント辞典』(1932年, 第19版),『大言海』(1934年版),『広辞林』(1934年, 新訂160版),『辞苑』(1935年, 第25版),『アクセント表示 新辞海』(1938年版),『大辞典』(1938年, 第3版),『修訂大日本国語辞典』(1940年, 修訂版)。いずれも独立項としては「ばあひ」のみが立項されており、『武信研究社和英大辞典』(1918年版),『齋藤和英大辞典』が「baai」のほか「bayai」のカタ見出しを立てたほかは、『改修言泉』が「ばあい」の項の中に「ばやひ」という読みを含めているのと、『国語発音アクセント辞典』が「バアイ〔バヤイ〕」として、「くだけた談話態」または訛音であることを示すのみである(なお『武信研究社和英大辞典』の1932年版には「bayai」は見当たらない)。こうした辞書記述に鑑みると、当時の「場合」の標準的な読みは「ばあい」であったと主張することが妥当と思われる。

¹⁷ この点については、戦後期における議会演説をはじめとする各種のフォーマルスピーチを確認する必要があるが、本論文では将来的課題とせざるを得ない。

本稿の最初にも述べたように、/baai/の3母音連続中にわたり音が挿入されて母音連続が回避されるのは、日本語の音韻構造を考慮した場合、ごく自然な音韻過程と思われる。そこでは挿入されるわたり音に /w/ と /j/ の選択肢があったはずである。調べた限りでは「ばわい」は洒落本にも岡田コレクション、またヘボンの『和英語林集成』や『音韻調査報告書』にも登場しない。まったく存在しなかったと断言するのは困難だが、明確に存在が確認されるのは「ばやい」のみであった。ここではわたり音は /j/ が採用されていたわけである。/j/ のわたり音を持った形式は、結局社会言語学的事情によりその後使用されなくなり、現代語はわたり音なしの形式である「ばあい」を主として用い、注9で触れた国会質問のように強調が必要な場合に、稀に /w/ のわたり音を持つ「ばわい」を使用するという状況に至った。つまりこの間の変化は、3種のわたり音 (/j/, /w/, わたりなし(ゼロ)) で区別される異形態それぞれに付された社会言語学的意味の転換と見做すこともできる。

以上のような流れで「場合」の読みの変遷を捉えると、岡田コレクションの位置付けとその価値も自ずと明らかになる。1900年代のSP盤レコードの登場とともに政治演説や講演を吹き込んだ録音資料が増加し始める(清水1988)、まさにその時期以降の音声を岡田コレクションは収めている。この時期は同時に日本語においては、一言で言えば標準語形成期に当たる時期である。明治期の国語調査委員会の設置に始まり、学制発布、国定教科書の使用、仮名字体の統一、字音仮名遣いの表音化とその廃止、歴史的仮名遣いの採用、常用漢字表の選定、「口語法別記」による標準語の規定などと矢継ぎ早に標準語化政策が出され(文化庁(編)2006)、日本語は急速な変化の途上にあった。さらにラジオ放送の開始を迎えて放送用語が大きく動き出したことは、塩田(2014)の詳述する通りである。

こうした標準語化に向けた途上期の、そしてそれが故に時間的にも空間的にも非等質的な日本語音声を取めた資料として、また日本語音声の録音を取めたもっとも早い時期の貴重なものの1つとして岡田コレクションを位置付けることができる。標準語化の途上にあるからこそ、文体や方言をはじめとした多様性が観察されるのであり、その一端を本論文は示したことになる。話し手が当時の政治家や有名実業家など著名人であったことから、その生育歴も容易に判明するという大きな利点も見逃せないことは、本論文の叙述からも明らかであろう。

7. おわりに

以上、岡田コレクションに収められた録音中に見られる「場合」の読みの分布について述べてきた。岡田コレクション中で多数派を占める「ばやい」は、結局のところ全国各地で使用が確認されていた方言形であった可能性が高い。この段階では「ばわい」という読みは確認されていない。戦後になり共通語が浸透するとともに「ばやい」が衰退し、「ばあい」が圧倒的多数を占めるようになった。「ばわい」という読みも強調する場面でのみ聞かれるが、これとても少数派に過ぎない。「場合」の読みは見事に標準化されたわけである。

「場合」の読みをたどるにあたり各種資料を渉猟したが、資料について本論文で果たせなかったことを記しておきたい。1つは、明治期の辞書記述の調査である。『明治期国語辞書大系』の

調査により、明治期の「場合」の発音状況はさらに明らかなものとなろう。同様に、本論文では僅かにしか行えなかった洒落本の調査も必要である。さらに言えば、戦後期の「場合」の読みの変遷は、各種録音資料を使用することで十分調査可能であろう。共通語化に伴う「ばやい」の衰退という仮説を実証するためには、これが欠かせない作業であることは言うまでもない。

参考文献

- 文化庁（編）（2006）『国語施策百年史』東京：ぎょうせい。
- 服部匡（2011）「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係—通時的研究—」『言語研究』140: 89-116。
- 飛田良文・李漢燮（編）（2001）『ヘボン著 和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』鎌倉：港の人。
- 飛田良文・松井栄一・境田稔信（編）（1997-）『明治期国語辞書大系』東京：大空社。
- 彦坂佳宣（1979）「洒落本類からみた近世後期尾張方言の待遇表現体系」『国語学』116: 24-40。
- 金澤裕之（2015）「解説（一）—文字化資料としての性格」金澤裕之・相澤正夫（編），9-16。
- 金澤裕之・相澤正夫（編）（2015）『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集—SP 盤レコード文字化資料』東京：日外アソシエーツ。
- 金澤裕之・田中牧郎・相澤正夫（編）（2015）『アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクションI』東京：想隆社。
- 国語調査委員会（編）（1905）『音韻調査報告書』東京：日本書籍。
- 国立国語研究所（編）（2004）『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成（第15巻）広島・山口』東京：国書刊行会。
- 国立国語研究所コーパス開発センター（2015）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引第1.1版』東京：国立国語研究所。
- 前川喜久雄（2006）「第1章 概説」『日本語話し言葉コーパスの構築法』（国立国語研究所報告124）1-22。東京：国立国語研究所。
- 増山幹高・河原達也・松田謙次郎・木村泰知・高丸圭一（2015）「座談会 国会審議をめぐる学際的研究の可能性」『レヴァイアサン』56: 8-53。
- 増山幹高・竹田香織（2015）「いかに見たい国会審議映像に到達するか？—国会審議映像検索システムの概要—」『レヴァイアサン』56: 54-79。
- 松田謙次郎（2008）『国会会議録を使った日本語研究』東京：ひつじ書房。
- 松田謙次郎（2016）「大正～昭和前期の演説・講演における漢語の読みのゆれ」相澤正夫・金澤裕之（編）『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』69-87。東京：笠間書院。
- 南部智史（2007）「定量的分析に基づく「が/の」交替再考」『言語研究』131: 115-149。
- 佐野真一郎（2011）Real-time demonstration of the interaction among internal and external factors in language change: A corpus study. 『言語研究』139: 1-27。
- 清水康行（1988）「東京語の録音資料—落語・演説レコードを中心として—」『国語と国文学』777: 129-143。
- 清水康行（1989）「二十世紀早期の演説レコード資料群に聴く合拗音の発音」『国語国文学』64: 33-44。
- 塩田雄大（2014）『現代日本語史における放送用語の形成の研究』東京：三省堂。
- 上野善道（編）（1989）「音韻総覧」『日本方言大辞典』下巻：i-77。東京：小学館。

関連 Web サイト

- 現代日本語書き言葉均衡コーパス（国立国語研究所） http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
- 国会審議映像検索システム（政策研究大学院大学） <http://gclip1.grips.ac.jp/video/>
- 全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」（国立国語研究所） http://pj.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/hogendanwa_db/

例文出典

- 『阿蘭陀鏡』…洒落本大成編集委員会代表 水野稔（編）（1982）『洒落本大成』第17巻（中央公論社）
- 『囲多好鬚』…洒落本大成編集委員会代表 水野稔（編）（1983）『洒落本大成』第18巻（中央公論社）
- 『河東方言箱まくら』…洒落本大成編集委員会代表 水野稔（編）（1987）『洒落本大成』第27巻（中央公論社）

The Pronunciation of the Word *baai* (場合) in 78 rpm Record Archives from the Taisho to the Early Showa Eras

MATSUDA Kenjiro

Kobe Shoin Women's University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

A survey of the recordings in the Okada Collection, a collection of speeches from the Taisho era to the early Showa era (from the 1910s to 1940s), shows that the most popular pronunciation of the word *baai* (場合) was *bayai*, and not *baai*. This is in stark contrast to contemporary Japanese, where, if we follow the distribution of dictionary entries, statistics based on the corpora, and actual pronunciations employed in Diet meetings, the word is pronounced as *baai* by an overwhelming majority. This paper attempts to account for the difference through examining corpus data, historical documents, and dialectological survey results. The form *bayai* appears in *Sharebon*, a late Edo-period novelette, from multiple dialectal areas; further, the *On-in Chōsa Hōkokusho*, the first official nationwide dialectological survey by the government published in 1905, indicates that *bayai* was a rather common dialectal form used in a number of dialects across the country. This paper claims that speakers from the Okada Collection simply used their native dialectal forms. With the spread of Standard Japanese after World War II, *bayai* has come to be recognized as a dialectal form, and in fact, even as a vulgarism. *Baai*, in contrast, emerged as the standard form that is widely used in contemporary Japanese. Although further research is required to trace the word's exact development in the post-WWII era, this paper demonstrates the historical value of the Okada Collection for the study of the development of contemporary Japanese.

Key words: *baai*, Okada Collection, CSJ, BCCWJ, *On-in Chōsa Hōkokusho*